

古代アメリカ学会 第7回西日本部会研究懇談会

【研究懇談会概要】

「南アメリカにおける土器と神殿の起源」と題した今回の研究懇談会では、エクアドルとペルーで精力的に調査を展開しているお二人をお招きし、最新の調査成果についてご報告いただきます。新大陸のみならず人類史研究全般に重要なトピックである、土器製作の開始、農耕の開始、さらには神殿建設の開始について、本懇談会を通じて情報交換や議論を広げていきたいと思っております。是非この機会にふるってご参加ください。

【日時】2018年6月30日（土）13：30～17：00頃まで

趣旨説明 13：30

発表1 13：35～15：05（発表時間1時間＋コメントおよび質疑応答30分）

小休憩 15：05～15：20（15分）

発表2 15：20～16：50（発表時間1時間＋コメントおよび質疑応答30分）

発表1「エクアドル沿岸部の土器出現前後の変化」

【発表者】鹿又喜隆（東北大学）

【コメンテーター】青山和夫（茨城大学）

【概要】エクアドルのサンタエレナ半島は、新大陸の土器の起源地と長らく考えられてきた。その代表がバルディビア文化であり、2014年から続くリアルアルト遺跡の発掘調査と研究は、新たな知見をもたらしている。本発表では、土器出現前後のラスベガス文化と初期バルディビア文化を比較し、その変化の実態を説明する。新要素としての土器のみならず、石器の技術・機能に関する詳細な分析結果について報告したい。

発表2「アンデス文明の最初期の神殿について：その成立過程と性格に関する試論」

【発表者】鶴見英成（東京大学総合研究博物館）

【コメンテーター】関 雄二（国立民族学博物館）

【概要】紀元前3000年頃より、神殿と呼ばれる大規模で公共的な祭祀建築が、ペルー北部の海岸・山地の各地に登場した。その築造と増改築が反復されたことが、アンデス文明の形成を促したとされる。とくに最初期の神殿群はどういった背景のもとに生まれ、アンデス文明の公共建築の伝統にどのような性格を与えたのだろうか。モスキート遺跡、コトシュ遺跡、ハンカオ遺跡の発掘調査や、地上絵・岩絵を含む広域踏査などの成果をふまえ、生業、交易、景観などに関するいくつかの仮説を複合的に提示する。

【会場】 名古屋大学文学部棟 127 号室

【主催】 古代アメリカ学会

【連絡先】

- ・ 西日本部会幹事・市川 彰（名古屋大学） ichiaki5*lit.nagoya-u.ac.jp
- ・ 古代アメリカ学会事務局 jssaa*sa.rwx.jp

（上記アドレスの*を@に換えて下さい）